

Love the Ski,
Think the Earth

マウンテンリゾート再生 という視点から 環境保護を考える。



スイスのリゾートでは広告・宣伝用の看板はほとんどない。国旗を立てることが営業中という合図。景観を損なわないために、村全体が共通の意識をもち、徹底的に整備している



カヤックリレーやスノーシューハイク、スキー場でマウンテンバイクなどなど、四季を通してさまざまな大会を行なう。写真提供/NPO元気・まちネット



ニセコの象徴的存在である美しき山・羊蹄山。その景観を守るために、無作為な建築物などの規制が求められる。「羊蹄山麓広域景観づくり」は、全道で初めての行政界をまたぐ指針

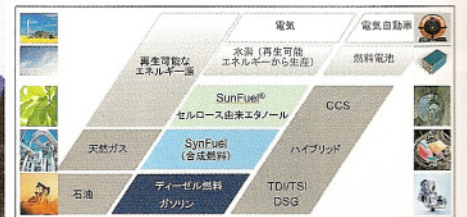


合計4時間におよぶシンポジウムは、「スキー場のある町作り」の活性化につながるだろう。シンポジウムは今後も継続的に行なわれる予定だ



大量の樹木の伐採や、土地の改変による自然破壊が問題視されるスキー場開発。環境共存型のリゾート開発の実現は稀。写真提供/NPOグローバル・スポーツ・アライアンス

フォルクスワーゲンの燃料、およびパワートレイン戦略



フォルクスワーゲンでは、CO₂排出量削減のために、あらゆる取り組みを進めている。燃料には、水素やバイオディーゼルなど、石油に替わる再生可能なエネルギー源に注目

11月、東京で「第1回マウンテンリゾート再生のための環境シンポジウム」が開かれた。発起人は元アルペンレーサーとして世界中を転戦してきた平澤岳。ずっとスキーができるように雪山を守り、楽しいマウンテンリゾートを作る、スポーツ活性化をテーマとした環境会議だ。5人の講師による事例報告と、パネルディスカッションが行なわれた。

ニセコ町企画課の加藤は、ここ数年の外国人観光客の急増によるニセコの現状を報告。秩序なき開発や、地元ペンションの衰退など地域課題は尽きない。今後の大きな取り組みとしては、景観法の活用だ。ニセコのシンボルである羊蹄山の景観と自然を守るために、昨年「羊蹄山麓広域景観づくり指針」を策定、来年度からはニセコエリアにおいて建築などの規制を強化する。自然を生かした景観こそが、地域の財産だという考えだ。

NPO元気まちネットの矢口は、長野県・大町市のサンアルピナススキー場と仁科三湖周辺の里山の自然を活用したアウトドアスポーツイベントを、8年前から運営している。矢口を中心に、首都圏に住む仲間がボランティアで、アドベンチャーレースなどの大会を開催。順位を争うものではなく、家族や仲間を楽しみ、フィールドを貸してくれた地元の活性化に寄与できる大会というコンセプトをもつ。一大会平均180名ほど集まる参加者は、環境保護に対して高い意識をもつ人がほとんど。自分たちの遊ぶフィールドは自分たちでキレイにするという考えで、競技中はゴミ拾いを心がけている。

拓殖大学の服部准教授は、スイスの山岳観光地の実態を学んできた。スイスといえば、乗用車の乗り入れ禁止のツェルマットなど、徹底的に自然を守るリゾートとして有名だ。山の中に建物を建てる場合は、遠くから山を望む時に建物が見えないように設計する、スクールの先生がレッスンをする時は、雪の下の新芽の位置まで知り、踏まないように案内するなど、すべては「山」を生かすために、リゾート開発が行なわれている。

スキーに行く時に欠かせないのはクルマ。しかしクルマが排出するCO₂削減問題は深刻だ。フォルクスワーゲン広報部の大出は、自社の環境問題への取り組みを紹介する。燃料消費量削減のために開発されたエンジンの採用や、エコドライブینگ講習の開催など、積極的だ。

最後に、NPO法人グローバル・スポーツ・アライアンス(GSA)常任理事の岡田。GSAでは、世界中のスポーツ愛好家を対象に、環境意識を高めて行動する「エコプレー」という考え方を普及している。岡田は、過去にスキー場開発事業に取り組んだ経験をもつ。山の表土をはぎとって造成し、復元するといふ非常に労力のかかる工法を実践。これにより、その地域本来の自然が戻るのだ。ジャンルの異なる5名が事例を紹介し、意見交換がなされたこのシンポジウム。「山」や「自然」が主役となるリゾートのあり方を考えるよいきっかけとなった。それは環境保護でも同じこと。美しい自然がなくなれば、スキーもできないし、観光もできない。